

TOYAMA 採用イノベーションスクール開講式

平成 30 年 9 月 10 日 (月)
富山県民会館

担当：尾山真、定村誠、藤田敬人(地域連携推進機構)

富山銀行と富山大学の主催による「TOYAMA 採用イノベーションスクール」の開講式が9月10日、富山県民会館で行われ、「富山だからできる富山の未来づくり」をテーマに掲げ、2018年度の塾生16人が意気込みも新たに活動を開始した。

開会のあいさつでは、富山銀行の岡部一浩専務が「どの企業にとっても人手不足は深刻である。その人手不足を解消し、学生を地域定着させることを目的に開講する」とスクールの目的について紹介。富山大学の鈴木基史理事・副学長は「現在の大きな地域課題は人口減少であり、大学はCOC+事業を通して、地域に若い人材を集めようとしている。今考えなければいけないのは出口戦略。地域企業が人材を効率よく獲得することが地域課題解決の一助となるので、皆さまと一緒に地方創生を進めたい」と述べた。

引き続き、財務省北陸財務局富山財務事務所の千崎誠一所長と、厚生労働省富山労働局の佐藤靖夫局長が来賓を代表してあいさつした。

富山県の現状として富山県商工労働部労働政策課の村中秀行課長は富山県によるU・Iターンを促進するための事業について、「富山県にU・Iターンすることを『Tターン』と名付け、働くことと暮らすことの双方で情報提供している」と説明。富山県内の大学への進学者は半数以上が県外出身者であり、卒業後もとどまる学生はそのうちのたった2割しかいないことから「県外出身の学生に対し、インセンティブをつくることも効果が期待できる」と提案した。

尾山真 COC+ 統括コーディネーターは、「就職活動において企業と学生を『売り手』『買い手』と捉えると、一方が有利になれば他方は不利になる。『地方創生』『地域の課題に取り組む』という視点で一丸となれば、双方が同じ思いを共有できる」と述べた。続いて塾生16人が一人ずつ自己紹介した。

基調講演では、神戸大学大学院経営学研究科の服部泰准教授が、「採用活動の概況」「採用活動について科学は何を明らかにしているのか」という二つのテーマで、現在の就職活動を取り巻く全国の状況について話した。

服部准教授は「東京の企業は、売り手市場の状況が東京オリンピックの年まで続くと考えており、それを見越して地方で採用活動を展開している」と解説。一方、学生は単に都内にある著名な企業を選択しているわけではなく、「採用担当者が信頼できるか、尊敬できるかも重要な決定要因となっている」と話した。また、「企業が考えているのは、『どうすれば学生が内定を受け入れてくれるか?』だが、私たちが問うべきなのは、『大学生たちはどんな悩みや不安を抱えて就活をしているのか。どのような採用活動をすればそれを解決できるのか?』。それを検討してほしい」と呼び掛けた。

「TOYAMA 採用イノベーションスクール」は12月までに講義やワークショップを実施。参加者は演習を通して自ら考え、新たな採用方法・インターンシッププランを構築し、修了式で発表する。



鈴木理事・副学長



岡部専務



基調講演する服部准教授



村中課長



採用活動について理解を深める塾生

高岡の中心市街地を会場に、クラフトに関わる統合イベント「工芸都市高岡の秋。2018」が9月21日から4日間の日程で開催された。富山大学芸術文化学部の学生は同イベントの一つである「高岡クラフト市場街」に加わり、地域住民と一緒にイベントを盛り上げ、高岡の歴史ある町並みや伝統工芸、クラフト、食など様々な魅力を発信した。

【高岡クラフト市場街】

芸術文化学部では、教育効果が高いと考えられる社会的課題に対する実践的な取組を単位化し、「高岡クラフト市場街」への学生らの関わりについては2016年から「プロジェクト実習」の一環としている。

山町筋と高岡駅に設けたコンシェルジュブースには、イベントやクラフトを紹介するために学生が企画・デザイン・制作した市場街パスポートやスタンプ、「食とクラフト」を案内するチラシ、オリジナルグッズなどが並べられた。作務衣や浴衣姿の学生が実際に「コンシェルジュ」となって、来場者にイベントや見どころを案内した。

また、工芸都市高岡クラフトコンペ入選入賞作家の作品を展示、販売している、「作家のひきだし展」にも学生が参加した。オリジナルの小型バッグ「サコッシュ」やフライヤーなども制作。学生らしいユニークな視点で作品展をPRした。このほか、学生有志と高岡の職人によるものづくりプロジェクト「クリエイティブ」の作品展示も来場者の目を引いた。



来場者にイベントを紹介するコンシェルジュの学生



コンシェルジュブースでグッズを披露する学生



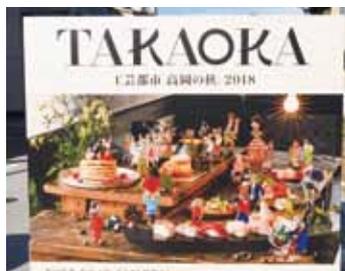
山町ヴァレーのガラス一面に描かれたイベントマップ



作家のひきだし展を担当した学生。ポスターもオリジナル



歩行者天国の賑わいイメージ



看板

■学生のコメント■

「クラフトと食」のチラシを制作した コンシェルジュの宮崎里歩さん (デザイン情報コース2年)



去年は冊子だったものを今年は持ち歩きやすいようにチラシにしたため、情報を厳選し、見やすさを重視しました。「食」の誌面はパスポートと同じ朱色、「クラフト」の誌面は高岡大仏や高岡銅器の青銅色をイメージした緑で表現しました。食材の写真が美しく見えるよう紙にもこだわりました。

高岡イベントマップを描いた コンシェルジュの大本龍馬さん (芸術文化学部1年)



最初にガラス窓に描かれていた絵を消すことから始まり、3日間で大まかな地図のデザインを描き、最後にイベント情報などを細かく書き込みました。全部で5日間かけて先輩と一緒に描き、面白いものに仕上がったと思います。

「作家のひきだし展」に携わった 芦田麻都佳さん(デザイン情報コース3年)



展示方法や照明の当て方、販売の方法やお客様への接し方、工芸知識が身につくなど、授業だけでなく、実際に作品展示に携わる事がとても勉強になります。クラフトコンペに入選した作家さんの受賞作品と生活に根付いた別の作品との違いを、多くの人に見比べて楽しんでほしいです。

「作家のひきだし展」に携わった 西野入萌利さん(芸術文化学部1年)



高岡の街をみんなで盛り上げている感じがとても楽しいです。授業や本ではなく、イベントで実際に体験して学ぶことで、知らなかった高岡の街の様子がよく分かりました。地域住民や様々な人との繋がりがどんどん広がっていくのが面白いです。

「作家のひきだし展」に携わった 樋口琴さん(デザイン工芸コース3年)



昨年はパスポートに携わりましたが、漆工芸を専攻しているので、今年は、作家さんのモノに対する思いを学ぶことができる作品展のグループに入りました。作品を展示するだけでは面白くないと、PRするバッグ「サコッシュ」の制作に取り組みました。目につくインパクトのあるデザインにするため、10案の中からひらがなの文字体に決めました。文字のスクリーン印刷も自分たちでやり、満足のいく出来に仕上がりました。



とやま塾参加者

富山県内の学生が朝日町の課題を理解し、同町の人と解決策を探る「とやま塾 in ASAHI」は 9 月 26 日から 3 日間の日程で、富山大、富山県立大、富山国際大の学生 18 人が参加し、同町のほたる交流館などで行われた。

初日は、開塾にあたり、富山大の鈴木基史理事・副学長の挨拶のあと、朝日町地域振興課の水野真也課長、商工観光課の折谷政明主幹、企画調整課の寺崎壮係長が「朝日町の特徴や課題」と題して講演した。引き続き参加学生が自己紹介し、グループに分かれて地域課題を検討した。夕食会には、笹原靖直町長や、富山大の遠藤俊郎学長、富山県立大の石塚勝学長、富山国際大の中島恭一学長も参加した。

2 日目の午前は、移住定住拠点施設の「こすぎ家」を見学、なないろ KAN では陶芸体験に取り組み、昼食には郷土料理のたら汁を食べた。午後からは、蛭谷(びるだん)地区にあるバタバタ茶伝承館を訪れ、茶笥(ちゃせん)で茶を泡立てて飲む「バタバタ茶」を体験し、独特の風味を楽しんだ。

朝日町商工会・同町観光協会統括参与の平木利明さんが、二つの茶笥がくっついた「夫婦茶笥」や発酵した「黒茶」を使うことを解説。富山県内で唯一の生産者だった方から、伝統継承のために製造方法を習い、「何杯でも飲むことができるお茶です」とバタバタ茶について解説があった。富山国際大子ども育成学部の男子学生は「バタバタと茶を泡立てる動きが楽しい。少し苦



蛭谷地区のバタバタ茶をいただく



宮崎海岸の海水で塩づくりを体験

みがあるけれど、おいしい」と述べた。

次に、グリーンツーリズムとやま理事長の長崎喜一さんが主宰する「夢創塾」では、学生がヒスイで知られている宮崎海岸で採取された海水を熱し、塩作りを体験した。地域おこし協力隊の小松裕亮さんの指導で、学生は砂などを除いた海水を煮詰め、水分を切ってから塩を布に包んでつるし、にがりを取り除く作業を行い、手作りのなめこ汁も味わった。富山県立工科大学の男子学生は「出身の長野県は自然が豊かだが、地元の方と交流する機会やイベントはなかった。参加しているんな発見ができてよかった」と述べた。

続いて、朝日町への移住者で地域おこし協力隊の服部彩子さん、横山理恵さん、浦部竣一さん、中山賢伸さんの話を聞いた。服部さん、横山さんはそれぞれ夫婦で移住しており、「朝日町で生涯を終えたいと思っている」と話すほど、充実した日々を送っていることを紹介。浦部さんはダンスを通じた地域おこしの活動の様子を伝え、中山さんは U ターン者ならではの思いを語った。

夕食会では、学生が地域おこし協力隊の 4 人や地域住民を交えて歓談し、テーマとする町の課題について情報を収集した。

最終日は、午前中はグループワークとして地域課題解決策づくりを行い、午後に地域おこし隊のメンバーや地域住民に発表した。閉塾式では学生に修了証が授与された。



移住者との懇談会の様子

キャリアデザイン講座を実施

平成 30 年 10 月 2 日 (火)
魚津高校

魚津高校キャリアデザイン講座は 10 月 2 日、同校で行われ、1 年生 160 人が魚津市の課題や未来像について考えた。同講座は、高大連携の取組の一環で、生徒が地域課題への視点を持ち、将来的に地元で活躍するリーダーとして課題解決に取り組む姿勢を教育する目的で開催された。魚津市役所が全面的に協力し、机上の話にとどまらないように実際の取組事例など具体的な情報を交えて行われた。

開講のあいさつに続き、魚津市企画政策課の前田久則課長代理が、富山県は第二次産業が盛んなものづくり県であることや、魚津市が実施しているゲームクリエイター育成プロジェクト、ビジネスプランコンテスト、女性が住みやすいまちづくりなどの取り組みを示し、地域活性化のための指針について「ボランティアでは長続きしないので、ビジネスとして成立させられるアイデアがほしい」と助言した。また、しんきろう、埋没林博物館、ホタルイカの群遊海面など魚津の見どころも紹介した。

定村誠 COC+ 連携推進コーディネーターは、生徒がこの日の講座で取り組む内容を説明し「発想として、魚津市役所や県庁に何かをやってもらおうという考え方ではなく、自分が支援したり、中心になったりできる取組を考えてほしい」と積極的な参加を促した。

生徒は 5 人ずつのグループに分かれ、魚津市の魅力についての意見を各自で付箋に書き出した後、大判紙に貼って整理し、近い意見や関連した内容を集めてアイデアを絞った。「海」「山」「水がきれい」「しんきろう」「ホタルイカ」など自然に関する事柄や、地元出身の著名人、魚津城、米騒動などの歴史、公共施設や観光地などが挙げられた。また、ゆるキャラの「ミラた

ん」、魚津高校周辺に多いカラスなどにも注目が集まっていることが分かった。

続いて 10 人ずつのグループになり、「魚津市をこうしたい」というテーマで話し合い、生徒からは「祭りが少ない時期に、マラソン大会などの新たなイベントをやってはどうか」などの意見が出された。町の印象については「何となく寂しい」「ラーメン店が多い」など、様々な意見が挙がり、魚津市の未来を考える複数の視点に分かれて話し合った。その後は「20 年後、30 代半ばになった時に魚津市がどうあってほしいか」をテーマに、大判紙に絵や文章を書いた後、クラス内で発表した。

黒部市出身の男子生徒は「魚津市がどうしていけばいいかが明確になったと思う。毎日通っている学校がある地域に対し、役立つ活動ができて良かった」と話した。魚津市出身の女子生徒は「他の地域の人が魚津市をどう見ているかが分かり、興味深かった。私自身は地域のことは知っていても、市全体のことは見えていなかったことに気づいた」と述べた。



魚津市の将来像について発表する生徒＝魚津高校

富山県機電工業会人材ワーキンググループからの提言

平成 30 年 10 月 3 日 (水)

富山県機電工業会は 10 月 3 日、県内高等教育機関に対して人材確保に関する提言を行った。提言は、同会の人材ワーキンググループで 16 回の会合を重ね、喫緊の課題である人材確保について検討し作成したもので、大学生の就職活動については、企業の魅力をすべて伝えることが難しくなっているため、学生にもものづくりや個別の企業の魅力を訴求することがポイントと指摘。県内高等教育機関に向けて、インターンシップ強化と制



人材確保に関する提言について話し合う出席者＝富山大学

度の魅力を伝える施策の必要性を訴え、協力を求めた。

同日富山大学会議室で開催された教育プログラム開発委員会の席上、寺田弥司治専務理事から提言の説明があり、若年層（小中学生や高校生）や大学生、UIJ ターン人材（特に社会人）に対して「チーム富山」として継続的に参画できるようなパッケージ型の人材確保政策も紹介された。

【大学生へのインターンシップ強化】

～個企業だけでなくものづくり魅力が十分伝わるように～

大学 1、2 年生の工場見学

※機電会員企業バスツアー、富山県ものづくり総合見本市の参加など

↓

大学 3 年生における、課題解決型インターンシップや富山型（ものづくりプロセス体験型）インターンシップの提供で、ものづくりの魅力を訴求する。また、各企業人材紹介ツールの充実、インターンシップでの直接的な人材交流などで企業の魅力を訴求する。